

板倉先生が日頃非常に重視しているのは、人間のやる気です。やる気になれば難しい科学も理解できるし、やる気になればいい仕事ができるのです。これまでの日本の教育はこのやる気の重要性をあまり認識してこなかったように思われます。また、やる気が大切と思ってもどうすれば人間はやる気になるのかということについてあまり本気で考えて来なかったように思われます。今もやる気を引き出す方法として多くの教員がやっている方法は「テストに出す」と言ったり、「入試に出題される」と言ったり、「単位不認定にする」と言ったりして生徒を脅す手法です。また、やる気を出させるために生徒同士を競争させようとする教員も少なくありません。こういう場合に生徒の出すやる気は本当に微々たるものです。

文科省も教員にやる気を出させるためにいろいろ考えています。しかし、なかなかいい方法は見つからないようです。東京都は主幹という中間管理職を作ってやる気を出さそうとしましたが、主幹になろうとする人がいなくて困っています。それどころか教頭になろうという人も少なくて困っています。文科省が教育課程を10年ごとに改訂するのも、教師のやる気を出させる方策の一つと考えているのかも知れません。多くの企業においても、やる気を出させるために有効な方法を考えつけないところが多いように思えます。

しかし、仮説実験授業を受けた生徒は、大きなやる気を出しています。仮説実験授業についてはすべての押しつけを排するという方針ですから生徒に対する脅しはありません。脅さなくてもやる気を出させることはできるのです。いや、脅さないからやる気を引き出していると言えるでしょう。仮説実験授業をやる教師もなやる気を

出して授業をしています。脅されてやる気になっているのではないのです。脅されて出すやる気はほんの少しです。自分でやる気になってやる時に出すやる気は無際限です。大抵、仕事をしすぎてしまいます。しかもそれが楽しくてたまらないのです。

セブンイレブンの鈴木敏文会長は社員に「仮説を立てろ」と繰り返し説いています。もともと何をどのくらい仕入れるかを決めるのは幹部の仕事でした。しかし、社員一人一人が何を並べれば売れるかという仮説を立ててそれにもとづき仕入れるということを繰り返す中で営業成績がよくなっただけでなく、社員は仕事が楽しくなってしまったのです。たのしくなった人の出すやる気は脅されて出したやる気と比べものになりません。これは、仮説実験授業において生徒が予想を立て、考え、討論することによって勉強がたのしくなってしまったのと大変良く似ています。

人間は楽しくなればやる気を出すのだということをよく考えてみる必要があるように思います。これは非常に簡単な話ですが、勉強は楽しくなくてもやるべきものだ、仕事は楽しくなくてもやるべきものだと考えている人にはなかなか受け入れられない考え方です。しかし、事実の問題として仮説実験授業では授業が楽しくなっているのです。セブンイレブンでは仕事が楽しくなっているのです。たのしくなれば人間はいくらでも力を発揮するのだということを教育においても、仕事においても、社会運動においても認識することで世の中もいい方向に変わっていくのではないかと思います。